

高等学校における特別支援教育の推進にかかわる実践的研究

－「支援ステップ表」の作成と

表を活用した特別支援学校コーディネーターの活動－

長期研修員 橋本 美佳

主題設定の理由

現状

高等学校進学者の約2.2%が発達障害などの困難を抱えています！



特別支援教育の推進に関する
調査研究協力者会議
高等学校ワーキンググループ報告によれば
(平成21年8月 文部科学省)

小・中学校に比べ体制整備に遅れ！
体制整備されていても
実際に機能していない！

群馬県では・・・
「特別支援教育推進方針」(平成20～24年)重点目標
・高等学校における特別支援教育体制の整備
・発達障害などを含む障害のある生徒に対する
進路指導の充実

特別支援教育の推進が急務

支援の指標として
「支援ステップ表」
を作成します！

特別支援学校コーディネーターと
高等学校コーディネーターの連携を図るとともに、
特別支援学校コーディネーターの専門性を生かし、高等学校を支援



特別支援学校
コーディネーター

研究のねらい

高等学校における特別支援教育の推進を図るために、特別支援学校コーディネーターが行う高等学校コーディネーターへの支援をまとめた「支援ステップ表」の作成と活用を通して、高等学校への支援内容や方法の有効性を明らかにする。

研究の流れ

本研究における
特別支援学校コーディネーターの
活動理念と
活動理念と

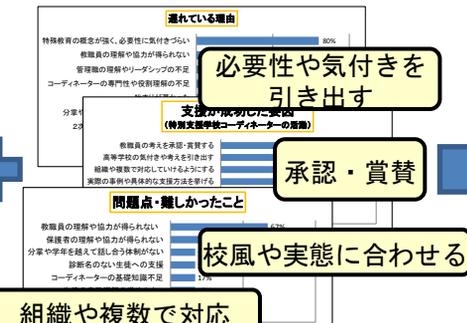
県内の特別支援学校と
高等学校コーディネーターへの
聞き取り調査を踏まえる

支援ステップ表
の
作成

高等学校コーディネーターの
気づきを引き出す支援



高等学校が組織で
取り組めるような
マネジメント的支援



項目	内容
1	特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議の報告(平成21年8月)によると、高等学校進学者の約2.2%が発達障害などの困難を抱えています。
2	群馬県では、「特別支援教育推進方針」(平成20～24年)重点目標として、高等学校における特別支援教育体制の整備、発達障害などを含む障害のある生徒に対する進路指導の充実が掲げられています。
3	特別支援学校コーディネーターは、特別支援教育の推進を図るために、高等学校コーディネーターへの支援をまとめた「支援ステップ表」を作成し、活用することを目指しています。
4	「支援ステップ表」は、特別支援学校コーディネーターの専門性を生かし、高等学校を支援するための指標として作成されています。
5	「支援ステップ表」は、特別支援学校コーディネーターの活動理念と一致した内容となっており、高等学校コーディネーターの気づきを引き出すための支援策が盛り込まれています。
6	「支援ステップ表」は、承認・賞賛、校風や実態に合わせる、組織や複数で対応などの支援策が盛り込まれています。
7	「支援ステップ表」は、特別支援学校コーディネーターの活動理念と一致した内容となっており、高等学校コーディネーターの気づきを引き出すための支援策が盛り込まれています。
8	「支援ステップ表」は、承認・賞賛、校風や実態に合わせる、組織や複数で対応などの支援策が盛り込まれています。
9	「支援ステップ表」は、特別支援学校コーディネーターの活動理念と一致した内容となっており、高等学校コーディネーターの気づきを引き出すための支援策が盛り込まれています。
10	「支援ステップ表」は、承認・賞賛、校風や実態に合わせる、組織や複数で対応などの支援策が盛り込まれています。

支援ステップ表（方針の抜粋）

ステップ0

信頼関係を築き、高等学校コーディネーターのモチベーションを高め、特別支援教育の推進に向けた考えや夢を引き出す

ステップ1

自校の特別支援教育の状況を集約して、学校全体の思いや願いに添った、特別支援教育の目標や具体的な取組が描けるようにする

ステップ2

高等学校コーディネーターが、校長や教頭と相談しながら、組織として取り組むための構想が描けるようにする

ステップ3

- ・教職員の意識や専門性の向上
～校内研修の実施～
- ・特別な支援が必要な生徒への
具体的な支援 ～校内委員会の開催～
- ・支援対象・支援方法の拡がり
～進路支援、保護者支援など～



高等学校コーディネーターと対話をし、支援ステップ表と対応させながら支援を進めます。
特別支援学校コーディネーターは黒字に徹することが大切！



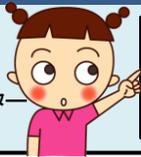
特別支援学校
コーディネーター

新たな取組は
ステップ1に戻ります

ステップ3を繰り返します。
直接的な指導などを減らしてい
き、高等学校コーディネーター
の創意工夫を支えます

実践1 全日制普通科A高等学校への支援（実践期間2ヵ月、訪問4回）

A高等学校
コーディネーター



ステップ0 【基本情報の収集】

コーディネーター1年目。特別支援学校を5年経験し、高等学校経験は1年目
生徒の様子は落ち着いている。診断名のついた生徒はいない

ステップ0

- ・困っている気持ちに共感、不安を共有
- ・連携して取り組むことを約束

ステップ1

- ・思考が深められるよう、特別支援教育推進事業
モデル校や進学校の取組の資料を提供
- ・生徒の学習の様子や教職員の指導の様子など
を聞き、校内の現状を一緒に整理

ステップ2

- ・協力者の存在に気付けるよう、相談しやすい人、
共通の思いを持っている人を質問
- ・教育相談係との関係に目を向け、情報を共有
する場所や方法を一緒に考えました

担任の先生の窓口
になれるといいな

何をしたら良いか
分からない

養護教諭は話しやすい
SCが来校する日は教育
相談の係会に・・・
そこで発言できます！

【支援後の高等学校コーディネーターの思い】

- ・教育相談係とつながれば良いと分かった。担任
や学年と、教育相談係のやりとりが盛んになる
と良い
- ・コーディネーターの役割を先生方に伝えられると
良い
- ・特別支援教育の資料回覧や書籍の紹介、校内
研修の実施に取り組みたい
- ・気がかりな生徒への個別指導や、成績が下位
の生徒への支援にも取り組んでみたい

【まとめ】

- ・高等学校コーディネーターの不安を軽減でき、他の教職員とかかわろうとする意欲を引き出した。
- ・A高等学校コーディネーターが、自分から養護教諭や学年の教職員、教育相談係長にかかわりをもつことが
でき、生徒の情報交換や自分の発言する場所を拡げることができた。
- ・A高等学校コーディネーターとして、これから具体的に取り組みたいことをみつけることができた。

ステップ0 【基本情報の収集】

コーディネーター3年目。特別支援学校を10年、高等学校を9年経験
 診断の有無にかかわらず、支援が必要と思われる生徒に気付いた担任がコーディネーターに相談する
 流れができている。現在、支援が必要な対象生徒として5名があがっている



B高等学校
 コーディネーター

教職員みんなで支援に
 取り組めるようになり
 たい

ステップ0

・今までの取組を賞賛し、高等学校コーディネーターの
 さらなる夢や、B高等学校の課題を引き出しました



特別支援学校コーディネーター

高等学校コーディネーターから、年間計画や
 学校全体の方向性を決める場としての【校内
 委員会の開催】と、具体的な支援方法を考え
 る場としての「ケース会議の開催」ができ
 たらという考えが出ました

校内委員会開催までの支援

校長先生や教頭先生にとって校内委
 員会の必要度は低いのかも



思いや願いが一緒だと分かっ
 たから、3月に開けるよう、
 教頭先生に相談してみます！

ステップ1・2

- ・校長や教頭から、B高等学校での特別支援教育の取組やコーディネーターへの思いを聞き取り、コーディネーターに伝えました
- ・資料を提供し、校内委員会のメンバーや年間計画、内容など選択してもらいながら具体的な案を一緒に考えました



【まとめ】

- ・特別支援学校コーディネーターが資料を提供しながら校内委員会の具体的な方法を一緒に考え、より具体的なイメージをもつことができた。コーディネーターの、モチベーションを高めることができた。
- ・B高等学校コーディネーターが、今まで気がつかなかった校長や教頭の思いや願いに気付くことができ、相談をし、取組を進めるきっかけを作ることができた。

ケース会議開催の支援

ステップ2

- ・意見や考えが出やすい場所を質問し、効果的なケース会議を開くためのメンバーに気付けるようにしました



学年会で話し合うのが現実的。
 先生たちは何とかしなきゃと
 思ってるけど、今までみんな
 で話し合う経験は少ないし・・・
 黙ってしまうかも・・・

ステップ3ー計画

- ・担任や関係する先生方の思いや困っている点に目を向け、生徒の実態把握やケース会議を行う方法を一緒に考えました



ステップ3ー実行

- ・特別支援学校コーディネーターはサポート役として参加
- ・B高等学校コーディネーターが中心となって行えるよう、なるべく静観するようになりました

学年主任や教育相談係と調
 整してみます。ケース会議の
 意味や目的、みんなで意見
 を出してほしいことを伝えます



活発な意見交換が
 なされました



ステップ3ー評価

B高等学校コーディネーターが収集した教職員の感想や支援の様子、変容について聞き取り、良かった点は賞賛し、次のケース会議の課題を引き出しました

特別支援学校コーディネーター

先生方は今まで情報を共有する場がなかっただけ。すりあわせができれば、具体的な支援に行けそう



「場を提供し、時間を作り、声をかけ、腰をあげること」がコーディネーターの役目！

B高等学校コーディネーター



【教職員の様子、変容】（B高等学校コーディネーターからの聞き取り）

- ・考えがあっても言えなかったことが話しやすくなった。学年の風通しが良くなった。
- ・学年の教職員から「気をつけてみます」という発言があった。授業中配慮をする教職員も出てきた。「一生懸命やっている」など生徒の良い情報も入ってくるようになった。
- ・「特別支援教育って何？」という反応や抵抗感はなくなった。

2回目のケース会議では、見守る支援が中心になりました

【まとめ】

- ・学校の実態に合ったケース会議のメンバーが選択でき、周囲にアプローチをしながら協力者を増やしていくことができた。
- ・B高等学校コーディネーターが、自校の教職員の生徒に対する気付きの力や思いの強さ、生徒を支援する力を引き出せたことを実感できた。
- ・校内のファシリテーターとしての役割意識を高めることができた。
- ・計画→実行→評価のサイクルを繰り返したことで、B高等学校コーディネーターの自立を促せた。

研究のまとめ

成果

- (1) 「支援ステップ表」を作成し、表を活用したことについて
- 「支援ステップ表」という指標があることで、支援の進捗状況を確認し、支援の内容や方法を見直すことができた。高等学校の状況や高等学校コーディネーターの経験値に違いがあっても、一貫性のある見通しをもった支援ができた。毎回の相談で変化する状況や高等学校コーディネーターの気持ちの揺らぎにも、臨機応変に対応することができた。
 - ステップ0から順番に支援を進めていくことを想定していたが、学校の状況や相談内容によって、開始のステップを変えたり、ステップ1と2を同時進行させる場合があることが分かった。
- (2) 「支援ステップ表」の内容について
- 高等学校コーディネーターの思いや願いを大切にし、自ら気付き、考え、実践するという視点に立って、支援内容を取り入れたことは、コーディネーターの自信につながり、自主性をうながすことができた。
 - マネジメントの視点を取り入れ、高等学校が組織として取り組めるような支援をしたことは、高等学校コーディネーターが校長や教頭と相談するきっかけを作ることができ、校内で特別支援教育に携わる人を増やすことができた。高等学校の教職員が支援の必要な生徒の特性に気付き、活発に意見交換をしたり、配慮したりする姿が見られた。特別支援学校の直接的な支援は少なくなり、高等学校が自治的に取り組めるようになる基盤ができた。

課題

- 定期的に「支援ステップ表」を見直し、より適切な支援ができる指標となるよう加筆・修正していきたい。さらに、「支援ステップ表」の使い方のパターンや、行った支援とその成果と課題をまとめ、特別支援学校コーディネーターがより具体的にイメージし、行うべき支援を予想できるような補足資料を作成していきたい。
- 引き続き文献や研究にかかわる資料、特別支援学校コーディネーターなどから情報を収集するとともに、実際にケースを重ねていく中で、課程や学科、校風などで支援内容を分類整理し、より使いやすい「支援ステップ表」にしていきたい。

問い合わせ先 群馬県総合教育センター
担当係: 特別支援研究係 0270-26-9218(直通)